

【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草(10) 2023年10月13日

ヨーロッパの諸問題解決の源泉・ポーランドと今後の世界

村野謙吉

ゆく河の流れのごとく、諸行は無常であり歴史は繰り返さない。
そしてポーランドを訪問する度に、日本の歴史では味わえないドラマチックな西欧史の流れを感じる。

今年(2023年)の5月30日から6月14日まで、2週間ワルシャワに滞在した。
6月4日、50万人が参加したと言われる、1989年の共産主義体制崩壊後、最大のデモがワルシャワであった。

9月は11日から20日までワルシャワに滞在。
帰国後の10月1日、約100万人が参加したデモがワルシャワであった。
同月15日にはポーランドの総選挙がある。



Demonstrators gathering for the March of a Million Hearts opposition rally in Warsaw, Poland, on Oct 1. PHOTO: REUTERS
10月1日、ワルシャワで行われた大規模デモ

現在、世界で起きている大きな出来事は、少なくとも過去50年に遡って考えないと歴史の大きな縁起の流れは把握できないから、少し過去に遡ってポーランドで起きた重要な歴史的出来事を確認したい。

1939年9月1日、ポーランドの港湾都市グダニスクを友好訪問を名目に港内に停泊していたドイツ海軍が、同市の近郊ヴェステルプラッテ（グダニスクの街を背後につきだした岬）に駐屯していたポーランド守備隊を急襲した。

開戦直前に、ドイツはソ連と相互不可侵条約を結んでいた。
 ヴェステルプラッテを発火点として、その戦火は極東にまで広がっていった。
 それが有史以来初めての世界大戦争、第二次世界大戦につながっていった。

民間人の被害者数は一説に、3800万～5500万、軍人の被害者数は2200万～2500万といわれる。

なぜドイツはポーランドを急襲したのか。

急襲したナチスドイツが——ポーランドの立場からは——悪いに決まっているが、一切は縁起的に連動しているから、そのような状況に陥ったポーランドにも、責任ではなく、原因の一旦はある。

その原因を探れば、当時、イギリスからヨーロッパ大陸とソ連につながる地域に展開する様々な高度に政治的打算の色模様が少しずつ浮かび上がってくる。

ファシズムのヒトラーと共産主義のスターリンという二人の独裁者に左右から蹂躪された経験をもつポーランドは、東西冷戦の歴史的に過酷な経験を余儀なくされた。

因に、ソ連のレーニンおよびスターリン政権下の秘密警察・ゲベパーウー(GPU)の初代長官ジェルジンスキーは、ロシアの政治に身を投じたポーランド人だ。

その経験もあってか、イギリスのMI6、イスラエルのモサド、アメリカのCIAに隠れてマスメディアには目立たないが、ポーランドの諜報機関は優秀であるといわれる。

1989年12月、マルタ島で米大統領ブッシュ(父)とソ連大統領ゴルバチョフが会談し、冷戦の終結を宣言した。しかし実態として米ソの対立は終結はしてなかった。

そして今また東西冷戦の余燼がポーランドにくすぶり続けているように「見える」。
 「見える」のであって、その実態と今後はどうなるかわからない。

2010年4月7日、ロシア首相プーチンとポーランド首相トゥスクが、第二次世界大戦中に将校など約22,000名のポーランド人が銃殺された「カチンの森事件」追悼70周年記念のロシア側主宰の式典のためにカチンを訪れていた。

同月10日、日程を違えて大統領 レフ・カチンスキーは同追悼記念に出席するために大統領専用機に搭乗していたが、同機はロシア連邦スモレンスク北飛行場に墜落し、彼と妻および多数の政府高官を含む乗員96名全員が死亡した。

2014年、ドイツ首相メルケルに強く支持されてポーランド首相の職を辞して現在はEU大統領(理事会議長)になったトゥスク氏とポーランドの新大統領ドゥーダ との間に現状認識と価値観に決定的相違と確執があると言われる。

うがった見方をすれば、ポーランド人トゥスク氏がEU理事会議長に選ばれた段階で、EU は、未だに東西冷戦の干渉地帯であるポーランドの不安定さ、それに関わるEUの脆弱さを感知していたともいえる。

2015年5月24日、ポーランドに、批判する側から“強権的”と言われる保守政権「法と正義の党 (Law and Justice)」が誕生した。

「法と正義 (PiS)」党首・ヤロスワフ・カチンスキ元首相は、死亡した大統領レフ・カチンスキーとは一卵性双生児の兄弟だ。

ところがロシアのプーチン大統領は、歴史的にロシア嫌いのはずのポーランドの政権の座についた“極右の”新大統領 アンジェイ・ドゥーダを祝福し、ポーランドとの“建設的連携”を呼びかけた。

プーチンのスポークスマンはポーランドを含む近隣諸国と“固定観念によって様々な負担で患わされることの無い (unencumbered by stereotypes) 良好な関係をもちたいと常に願っている”と Interfax 通信社に語った。(Putin wants ‘constructive’ Poland ties after Duda presidential win; AFP: May 24, 2015)。

新大統領 アンジェイ・ドゥーダ は熱心 (‘devout’) なカトリック教徒であり、約30%の大衆的階層に影響力のあるといわれるポーランド・カトリック教会と密接な関係にあり、故大統領レフ・カチンスキーの“精神的後継者”を名のっている。

覇権大国は、一度獲得した衛星国を手放さない情念を維持しているだろうから、ましてや手放してしまったかったの衛星国・ポーランドにロシアが“政治的愛着”を示すのは予想されることである。

「法と正義 (PiS)」なる政党が、EUの基本原則である「法の支配」に抵触するがごとくに三権分立であるべき司法権に介入したり、公共放送を支配したりして表現の自由を脅かすとするれば、多大な犠牲を払ってこれまでポーランドが築き上げてきた自由世界の一員としての地位がおびやかされかねない。

歴史的事象の一切は縁起的に連動しているから、ポーランドの政治地図から拡大してEUの政治地図に目を転じれば、ポーランド一国でおこっていることとEUで起こっていることが連動して当然だ。

2016年、刺激的な見出しの報道が The Telegraph (2016/01/16) にでた。

「アメリカはプーチンの戦略について重大かつ総括的な検証をおこない、ヨーロッパのさまざまな政党に秘密裏に資金援助をしているとしてロシアを告発」との趣旨だ。

そして、アングロサクソンのイギリスは“新たな冷戦”を警告し、クレムリンがヨーロッパでの分断支配を求めている、と言い出したのだ。

各国の政権に様々な形で影響力を行使しているのは、その規模と質においてアングロ・アメリカンの側が格段に勝っているだろうからロシアは、自分の所業を棚に上げて何を言うか、と考えているかもしれない。

が、世界の大勢における信頼度ということになれば、ロシアよりアメリカの方が圧倒的に信用度が高いのが実情だろう。

ロシアと中国とアメリカと、亡命先を選べといわれれば、100人うちの99人は、いかに二重規範の国家であり、原住民を殺戮し、アフリカ人の奴隷を虐待した歴史をもつとはいえ、つねに文明の明るい面一夢と野心の実現の自由一を表看板にしている議会制民主主義の国アメリカを選ぶだろう。

イギリスとロシアの外交関係は、ここ10年以上にわたって深く冷え込んでおり、ロシアの工作員であったリトビネンコに対するポロニウム210を使用した殺害事件の公開調査(2015/01/27開始)があきらかになれば、両国の関係はさらに冷え込む可能性があるといわれる。

「それは巧妙なゲームだ。国民国家 (nation states) 間には不文律があるが、これらのルールが明らかにロシア側に侵害されている」、「ロシアのプロパガンダ機動組織は現在 “非常に活発” で、安全保障の専門家が言うところの “混合戦争 (hybrid warfare) ” を配備している。それは通常の軍事力とゲリラ戦術とサイバー戦争をブレンドしたものだ。」

としてロシアに対する不信感がイギリスで生まれている。(Dr Igor Sutyagin; 英国王立防衛安全保障研究所)。

アメリカの国家情報長官 (James Clapper) は、アメリカ議会から、過去10年間にわたるロシアによるヨーロッパの様々な政党への秘密裏の資金提供を重点的に調査することを要請された。

アメリカ側の担当者らは、どの政党が調査対象になるかあきらかにしていないが、可能性として考えられるのは、極右グループ (far-right groups) であり、ハンガリーの Jobbik、ギリシャの Golden Dawn、イタリアの the Northern League、フランスの Front National など、それらのグループは、2014年にロシアの銀行から900万ユーロ (690万ポンド) のローンを受け取ったとしている。

ポーランドの話題にもどる。

ドナルド・トゥスク 内閣の外務大臣、ヤロスワフ・カチンスキ内閣の国防大臣を勤めたベテランの政治家でありジャーナリストであるシコルスキ氏は「外交問題」誌の対談で次のように語った:

ポーランドは「ヨーロッパの諸問題解決の源泉である (a source of European solutions)」…
ドイツとの和解は現在完璧である。…

今は、ロシアとの和解に向かって作業中だが、ドイツの場合より困難なことは、第二次世界大戦で勝利した彼らの誇りをスターリン主義への嫌悪から解き放すことにロシアが困難をおぼえていることだ。…

ポーランドは、数千人のポーランドの捕虜の虐殺現場であるカチンにプーチン大統領が訪問したことを評価している。… ポーランドはアメリカより、まずロシアと関係の再調整をはじめた。…

(‘The Polish Model’; A conversation With Radek Sikorsky; FOREIGN AFFAIRS; May/June 2013)」

この対談記事は2013年のものだ。ロシアを知り抜いているはずのシコルスキ氏の対ロシア外交努力と認識は、現在、はたして報われているのだろうか。

以上に述べたような欧州の複雑な政治状況の中で、ポーランドは西でドイツ、南でチェコとスロバキア、東でウクライナとベラルーシ、リトアニア、そして北東ではロシア (カリーニングラード) と国境を接している。

“ヨーロッパの諸問題解決の源泉” であるポーランドの首都ワルシャワは、現在のところ平穏を保っている。

10月1日のデモには、ワルシャワ市長も “100万の心の行進” に参加した。

10月15日、総選挙が実施される。

現政権反対派の“100万の心”が一致団結して誇りをもって掲げているのは、ポーランドの国旗である。



ポーランドの国旗を掲げて行進する「100万の心」*

(2023年10月2日・記；2023/10/10)

(参考)

- ・【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草(9)・2023年7月31日・ワルシャワで想う「脆弱な花盛りの世界」
- ・【NPJ通信・連載記事】一水四見・歴史曼荼羅(31) 2016年1月28日・「米ソ冷戦は終わっていない」ーポーランドのディレンマと日本の将来。

* Warsaw Mayor Rafal Trzaskowski also joined "march of a million hearts" demonstration in Warsaw, Poland, Sunday, in support of the opposition party and former Prime Minister Donald Tusk. Photo courtesy of Warsaw Mayor Rafal Trzaskowski/Twitter